

漁師列伝 No.1



「海の恵みと生きる兄弟船」

茨城県水産試験場定着性資源部 主任研究員 高橋正和

「水産業を取り巻く環境はととても厳しい」という言葉は、我が国の水産業の現状を説明する枕詞のように使われています。水産界全体を見れば確かにそのとおりなのでしょう。しかし、個々の漁師に目を向ければ、どっこい浜には元気で頼もしい漁師がまだまだ健在です。今回は、茨城県日立市において底びき網漁業を営み、「海を愛し」、「魚を愛し」、「漁業を愛し」、自分達の漁業経営は勿論、地域水産業の再生のためにも奮闘している小泉兄弟についてお伝えします。



小泉兄弟（右：兄昭彦，左：弟光彦），帰港後「大昭丸」の前にて。

小型底びき網漁船「大昭丸」

小泉兄弟の暮らす日立市は、典型的な企業城下町として発展してきました。30kmの海岸線には6漁港、4漁協が存在する水産業の盛んな地域でもあります。

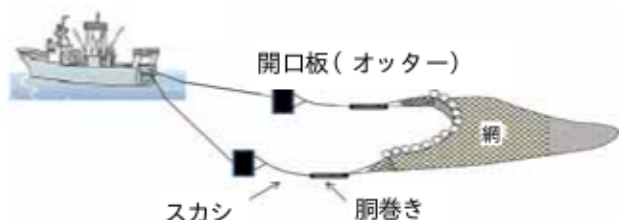
兄の昭彦さんは67歳、弟の光彦さんは

64歳、日立市の南部に位置するJF久慈町に所属しています。兄は船主兼漁労長として「大昭丸」の経営を担い、弟は機関長として経営を支えています。小泉兄弟の「大昭丸」は、昭和57年建造の船尾オッターロールの小型底びき網漁船(14.9トン)です。茨城県沖の水深100m以深が主漁場で、ヒラメ・カレイ類、キアンコウ、ボタンエビ、ヤナギダコ、ヤリイカなど「常磐もの」として評価の高い魚介類を漁獲します。

逆転の発想 - 底びき網の軽量化-

高度経済成長の1960年代は、漁業経営も右肩上がりで浜は活気に溢れていました。しかし、1970年代のオイルショックで「大昭丸」の経営は苦しくなり、兄弟は経費削減について真剣に考え始めました。それまでの底びき網は、網を海底にいかに着けるかに重点がおかれていました。しかし、そのために網を重くすれば、その分エンジンの馬力が必要で、燃油消費量も増えます。網を重くすれば、漁獲量も伸びるけれども、その分経費も増えることとなります。結局、収入から経費を差し引いた利益をいかに確保するかが重要です。そこで、小泉兄弟は経費の削減と資源に優しい操業を図るため、網の軽量化を目指しました。まさに逆転の発想です。そのためエンジンの状態を示す排気温度に着目し、いかに排気温度を低く抑えることができるか、つまり燃油消費量をいかに削減するか試行錯誤を繰り返しました。その結果、漁具を沈め、魚の増集効

果を高める「胴巻き」の大幅削減、今までメーカーまかせであったオッターの調整・改造を自ら行うなど、これまでタブーとされてきた方法で漁具の改良に取り組み、20年近くかけてようやく、漁具の軽量化が実現し、エンジン負荷を抑えた省エネ操業が確立したことは特筆すべき点です。



大昭丸の漁具構造の模式図。胴巻きを大幅削減し、漁具を軽量化、燃費が向上した。

浜を越えた地域ネットワークの構築

2度のオイルショックで、浜では漁業経営改善に対する意識が高まり、弟の光彦さんが中心となり、昭和58年(1983年)に久慈浜トロール研究部会が立ち上がりました。しかし、なかなか結果が見えず、研究部会の活動は1年半で休止状態になり、その後は光彦さんがほぼひとりで調査を続けていきます。その結果、地元である日立市民の水産業についての理解が乏しい現実が明らかになります。そこで、「地元水産業への理解促進」を取組の柱として、様々な取組を行っていきます。その活動を通じ、漁協と行政・商工会議所・市民団体とが連携した取組が展開されることになり、平成15年(2003年)に県内では初めて「市の魚」が制定され、「さくらだこ」が選定されました。こうして地元において水産業の理解が深まり、地域資源としての水産業が再認識されるようになりました。このように漁師自らが課題を設定して調査し、その結果に基づいた取組を計画・実行し、それが地

域を動かす原動力となったことは、大いに評価できることだと思います。平成17年

(2005年)、光彦さんは、より多くの人に地元水産業を理解してもらいたいと、これまでの調査結果をまとめた「海の恵みと生きる」を自費出版されました。本研究会のホームページにも著者の了解を得てPDF版で公開しています(巻末アドレス参照)。ご一読をお奨めします。

海の恵みと生きるビジネスモデルへ

操業の合間の限られた時間のなかで、色々と考えて行動するには制約も多く、大変なご苦労があったことと思います。また、「海の恵みと生きる」漁師として、常に前向きに将来の事を考え、個人の漁業経営だけではなく、広く地域全体のことも考え行動してきた姿には、感銘を受けます。普段は決して仲の良い兄弟のように見えませんが、お二人が真剣に漁業の事を考えているがゆえに、意見の衝突もあるのでしょうか。お互いが自分の役割と相手の役割を理解し、信頼しているからこそ、今の「大昭丸」があるのだと思います。残念ながら「大昭丸」に後継者はいないのですが、地域の中で小泉兄弟の考え方やこれまでの取組成果が受継がれていくことを期待しています。

小泉兄弟のように元気で頼もしい漁師は全国にたくさんいることでしょう。こうした漁師の考えや取組を吸い上げていくことが、ビジネスモデル構築の近道になると思います。

大昭丸にて漁具の構造と軽量化について著者に説明する小泉漁労長(右下)。

